

私にとっての釈義とは

関西学院大学商学部助教授・宗教主事
辻 学

1 聖書の思想が持っている幅

この『アレイア』でもそうだが、聖書の釈義といえば、教会の信仰や礼拝説教との関係といったことばかりが関心の的となるようである。しかしながら、聖書を読み、釈義するということは、キリスト教の信仰にどのように役立つかということよりもずっと広い観点からなし得る。キリスト教主義学校の教師という立場にいと、そのことを強く感じる。大学で宗教主事をしている私の主たる仕事は、学部チャペルアワーの運営と、キリスト教の講義である。キリスト教の講義では私の場合、聖書やキリスト教の基礎的な知識を提供すると共に、自分たちの生活・社会における様々な問題を取り上げ、その問題に聖書やキリスト教の視点から何を言い得るか、という形で話を進めている。例えば、アダムとエバの話から、男女のあり方を考えたり、イエスの安息日論争を題材にして、法とは何かという問題を取り上げる、といったことを

している。

講義の教科書として数年前に共著で出版した『現代を生きるキリスト教』（教文館）の後半部では、「男女」「家族」「生命」といった主題を八つ取り上げ、各々について、聖書・キリスト教史・キリスト教思想という三つの角度から論じる形を取っている。その狙いは、講義の中で学生が、自分の身の回りにある、それまでは深く考えることのなかった問題に気づくと共に、聖書やキリスト教を通して、その問題を自分の事柄として受け止め、考えてくれるようにということにある。

この形式で講義を進めると、聖書やキリスト教史の話は、各々の主題をめぐり、過去の対話という視点で捉えられることになる。例えば、生命や環境の問題について聖書の著者はどのような視座を提供しているか、キリスト教史にはどのような事例があるかということを見ていく、という具合である。過去の対話を通して私たちは、自分たちが現在抱えている問題に光を当て、考える。聖書はそ

の対話相手なのであり、聖書の応答を聴こうとする作業が釈義であるということになる。

そのような「過去の対話」としての聖書釈義は、キリスト教信仰の有無を基本的に問わない。キリスト教の受講者はそのほとんどが非信者であり、聖書を古典として読んでいく。しかし、だから聖書がわからない、ということはない。受講者からの反応を見ると、むしろ、信仰を媒介しないがゆえにかえって、聖書を人間の精神的・文化的な遺産として捉え、対話することが素直にできるとすら言えるように思う。それゆえ、前号のこの欄で木田献一氏が「聖書の釈義は結局のところ、信仰に始まって信仰に終る」（二五頁）と書いておられるのには、ある種の教会的偏狭さを感じる。釈義は、信仰の有無に関係なく、聖書に関心を持つ全ての人に開かれている。信者でない学生を相手に聖書を語っていると、その実感が湧いてくる。

聖書の語る思想には、キリスト教信仰の有無にかかわらず、読む者の心を捉え、自省を

促し、新たな視点を提供する力がある。私は時々、まるでキリスト教を信じていないかのように聖書を語る、と学生から評されることがあるが、それは自分が、キリスト教信仰という前提なしでも聖書の思想を十分に味わえることを受講者にわかつてもらえるよう努めているゆえではないかと思う。聖書は、キリスト教信仰という視点によって編纂されているのだが、しかしそこに盛り込まれた思想は、私たちが「信仰」という範疇で捉えているものを超えた幅があり、聖書を古典として読む者にも大いに訴える内容を持っている。

2 前提としてのキリスト教理解

とはいえ、聖書が持つ魅力を客観的に語るということとは出来ない。聖書の思想を紹介する時には、当然ながら、どこに強調点を置くかということが問題となるのであり、そこには、紹介する私自身の聖書理解が影響する。この問題は、とりわけ新約聖書を扱う時には、自分のキリスト教理解と直接的な形で関わってくる。イエスをどのように描くのか、イエス以降の原始キリスト教史のどこに意義を見出すかといった事柄は、自分自身とキリスト教の関係をどう捉えているかに深く関わっているからである。信仰がなくても、イエ

スや原始キリスト教史を描くことはもちろん出来る。だが、一人の信仰者である私がそれを描く場合には、「自分の宗教」としてのキリスト教理解を抜きには出来ないであろう。

前掲の『現代を生きるキリスト教』の中で私は、新約聖書概説の大半をイエスに費やしている。そして、当時のユダヤ教体制とその指導者を批判するイエスの姿を強調し、十字架の死についても、その帰結としての、権力者による抹殺という面に重点を置いた。他方、キリスト教信仰にとっては重要な意味をもっている復活については、僅かな行数しか割かなかつた。パウロを扱っている頁数も、イエスについての章と比べれば非常に少ない。

初めから意図してそのような構成にしたわけではないのだが、それだけにかえてこの結果は、私自身のキリスト教理解を反映しているように思われる。すなわち、キリスト教信仰にとって大切なのは、イエスの言葉と実践をどう受け止めるかということなのである。イエスは、自分が生きている社会の中の歪みに抵抗して、「然りは然り、否は否であれ」(ヤコ五・一二。参照マタ五・三三以下)ということを、死に至るまで貫いた。その生き様はどう自分を結びつけるかという問いから、イエスへの「信」は始まったはずである。イ

エスの十字架と復活も、その問いを抜きにしては、自分の事柄として受け止められないのではないだろうか。

3 イエス理解の「型」を問う

そのような観点から新約聖書を読もうとする私にとっての意義は、新約聖書を通して、初期キリスト教の中にどのようなイエス理解の「型」があったのかを問う作業となる。

この歴史的な問いは同時に、現在の私、そして教会が持っているイエス理解を批判的に省みることもある。この反省は、教会にとって重要だと思う。というのも、教会においては、自分の信仰や教義の内容を前提として、それに合うように聖書を読むという傾向が強いからである。

信仰者にとっての聖書意義は、自分のそれまでの信仰理解を省みて、新たな理解の可能性へと開かれるための作業である。したがって、聖書学は常に、神学に対する反省という役割を担うものと私は理解している。

私が、ヤコブ書や牧会書簡といった、新約聖書の中ではどちらかというと「周縁」に置かれることの多い文書に関心を持つのも、イエス理解の「型」の多様性を明らかにしたいという思いがあるからに他ならない。日本で

は、学問的関心も福音書とパウロに集中する傾向があり、これら「周縁」文書の研究が手薄であるという事情も、ならば自分が取り組んでみようという気持ちになった原因ではあるが、それよりも、従来のイエス理解（そして信仰理解）を反省する材料を、新約聖書からもっと得られるはずだという気持ち自身がの中では強く働いてきたように思う。

私は昨年、『ヤコブの手紙』（現代新約注解全書、新教出版社）を上梓したが、ヤコブ書はまさに、私たちの信仰理解を批判的に省みるのに最適の文書であると言えよう。ヤコブ書をめぐる最近の研究は、ヤコブ書に何らかの「神学」を見出そうとするものが多い。ヤコブ書は倫理的訓戒の羅列であって、神学的思想を欠いているというM・デイベリウスの評価が長らく学界を支配してきたが、その反動として、ヤコブ書から神学思想を読み取ろうとする動きが強まってきたわけである。

しかし、そもそも新約の文書から「神学」を読み取らねばならないという考え自体が反省されるべきではないだろうか。聖書だから、信仰の糧になるような神学思想を釈義によって導き出すべきだというのは、「信仰的」な姿勢かも知れないが、そのような釈義は自ずと、自分の信仰に合うような事柄を読み取ろうと

する姿勢につながり、聖書の文書が持っている、狭義の神学や信仰という枠を超えた思想的な豊かさを見過ごすことになりかねない。

ヤコブ書の独自性はむしろ、神学思想を敢えて語らないというところにある。神学そのものを語るのではなく、神学概念や宗教的儀礼が、目の前にいる「隣人」を助け支える実践に結びついているかどうかをヤコブ書は問題にする。信仰告白や宗教儀礼を大事にしているかどうかではなく、どのような実践に結びつくかによって、信仰の正しさは測られるというのがヤコブ書の主張なのである。

これは紛れもなく、自己満足的な教会のあり方に対する批判であり、この批判は私たち現代の教会や信仰者にも向けられている。しかし私たちは、この耳が痛い主張を正面から受け止めてきただろうか。ヤコブ書の中心に「知恵」や「終末論」といった神学思想を据えようとする試みは、この厳しさを覆い隠すものでしかない。

第二パウロ書簡である教会書簡（I・II テモテ、テトス）も、キリスト教理解の型を問うという視点から捉えれば、非常に興味深い。教会書簡は、パウロ思想を硬直化させているとか、独自の神学的な展開がないなどと酷評されることが少なくないのだが、パウロの遺

したキリスト教理解をめぐって、パウロ以後の教会が葛藤していた様子が背後に窺われ、大変示唆に富む。パウロ書簡に述べられている神学や倫理をいったい、社会の中の宗教的マイノリティである教会がどのように実践していけば良いのかという課題を持っているという点で、教会書簡と私たちは同じ地平に立っているのである。教会書簡の倫理を批判することは容易だし、実際、批判なしに読める内容ではない（Iテモ二・一二など参照）。だが、それを切って捨てることができるほど、私たちの教会は素晴らしいパウロ理解を持っているのだろうか。

4 歴史的な読み方Ⅱ過去との対話

ここに述べたような聖書の読み方は、必ずしも聖書を古典すなわち過去の文献として扱わなくても可能である。しかしながら、自分たちのイエス理解・信仰理解を反省するための対話相手として聖書を読むならば、聖書を歴史、すなわち自分たちの宗教の過去を描くものとして読むということが重要だと思う。とはいえ、それは、聖書に基づいて初期キリスト教の歴史を客観的に再構成しようというのとは違う。

本シリーズですでに水野隆一氏（三五号）

や山口里子氏(三八号)が述べておられるように、客観的な歴史的再構成に基づいた、聖書テキストの「正しい意味」を見出すのが釈義だという考え方は最早過去のものとなりつつある。歴史の叙述はあくまでも一つの「物語」としてしか存在できず、そこに、物語る人間の視座や立場が反映することは避けられないということが認識されるようになったのである。

では、信仰者にとって、歴史としての聖書を読むとはどういう意味を持つのだろうか。全ての歴史は「物語」としてのみ存在し得るとすれば、自分たちが信じている宗教の過去をどう物語るか、ということが、歴史的に聖書を釈義し、初期キリスト教史を再構成する作業の身だということになるであろう。

確かにそれは一つの「物語」であって、その物語は様々な視点から語り得る。だが、それが現実存在した過去を描く作業だという「歴史的意識」こそが、可能な限り正確に、虚構や捏造で事実を曲げることなく物語ろうとする「解釈者の倫理」を生むはずである。そして、その物語と自分たちがつながっているという意識が、過去を物語りつつ自分を省みるという作業を可能にするのだと思う。

5 聖書を踏み越えて

聖書の釈義とは、自分なりの問題意識を持って聖書と対話することであり、聖書の応答を受けつつ、自分自身の考えを作っていくことである。とすれば、対話である以上、聖書の応答に対して批判的に問い返すことは可能であり必要でもある。聖書とて、人間の手によって書かれたものである以上、時代の制約から自由ではあり得ない。したがって、そのまま受け入れることが困難な内容を黙殺する必要はない。聖書の言葉に対して「否」を唱えることも私たちにはできるのである。

キリスト教信仰にとって大切なことは何か、いま私たちは何をすべきなのか、といった問いに対する答えは、聖書との対話を経て、私たちが自分の責任で見出すしかない。現代を生きる人間に届く言葉を語ろうと教会が真剣に思うのならば、その責任を自覚しつつ聖書と対話し、いま語るべき言葉、今なすべき行いを見出すべきである。そして、必要であれば聖書の言葉をも踏み越えて進む自由が私たちに与えられている。固定された文字に囚われず、今自分たちと共に働く神を信じる、それが、「聖霊を信じる」ということではないか。「文字は殺し、霊は生かす」(IIコリ

三・六)というパウロの言葉も、まさしくその自覚を言い表したものであろう。

いま私が語るべき言葉、それは人によって違っていて良い。私が置かれた状況、目の前にしている課題によって違った答えが、聖書との対話を通して立ち現れてくるからである。ただし、人によって違うとはいえず、どのような答えでも良い、というわけではない。キリスト教理解・信仰理解は人によって異なる。だが、その理解が本当に、一人一人の人間を大切にする視点から編み出されたものなのかどうか、現代風に言えば、「人権」を守る振舞いにつながるものかどうかが、正しさの基準となる。私の信仰理解が、その基準に適っているかどうかが問われるのである。

唯一のキリスト教理解といったものはないし、純粋な信仰理解というものもない。私自身の理解も、多くの中の一つに過ぎない。したがって、教義論争によって「正しいキリスト教理解」へとたどり着くことはない。すべての理解はただ、どのような実践につながるかによってのみその「正しさ」を測られる。「木はそれぞれ、その結ぶ実によってわかる」(ルカ六・四四)と言われているように、全ての信仰は、どのような実践に結実するかによってその価値が決まるのである。